

木野

KINO PRESS.
KYOTO SEIKA UNIVERSITY

通信

第79号

2022 Dec.

特集 京都精華大学と
SDGs

特集2

明窓館が始動

多様な交流と成長の場に

卒業生インタビュー

ソ ジウンさん / 小山 祥明さん



京都精華大学とSDGs



2015年に国連が提唱したSDGs(Sustainable Development Goals) 持続可能な開発目標)。世界でも取り組みが進み、日本でも大きな潮流となっています。2030年までに達成をめざす17のゴールと169のターゲットを定め、地球上の「誰一人取り残さない」と誓うこの目標には、京都精華大学が開学当初より注力してきた活動とも重なる部分が多分にあります。今回はそれらの活動をSDGsの観点からとらえなおし、教育・研究・大学運営、それぞれの視点からあらためて紹介します。

建学理念に通じる 精華のSDGs宣言

京都精華大学は2020年に「SDGs宣言」を発表しました。現代の世界に共通する課題に大学全体で取り組み、多様性と包摂性ある社会の実現に貢献する姿勢を示したものです。

〈年齢、人種、性別、身体的特徴、性表現など表面的に認識されやすいものから、国籍、宗教、家庭環境、出自、働き方、性自認、性的指向など表面からは認識されにくいものまで、すべての人の違いを尊重しながら、「誰一人取り残さない」持続可能な社会の構築に貢献するために、全学的にSDGsの実現に向けて取り組んでいくことを宣言します〉

ここに書かれた理念は、近年生まれただけではありません。本学は1968年の建学時から「人間尊重」「自由自治」を教育の基本方針に掲げ、学生、教員、職員すべてが人格的に平等な大学の創造を一貫してめざしてきました。その歴史を踏まえて2016年に「ダイバーシティ推進宣言」を行い、翌年にはダイバーシティ推進センターを設立。さらに、2018年版宣言では「違いとともに成長する」というコンセプトを打ち出し、より明確な方針を示しました。先の「SDGs宣言」は、こうした歩みの中に位置づけられるものです。

京都精華大学
SDGsの取り組み



17目標への理解深い 地域で実践する授業

京都精華大学には、学生が自らを取り巻く世界に目を向け、さまざまな課題と主体的に向き合う授業が数多くあります。その基礎となるのが1年次の必修科目「自由論」。前学長のウズビ・サコが幅広いゲストとともに、ダイバーシティや近代日本、環境問題などについて「自由」を切り口に論じています。ほか、国際化学部部の共通教育科目では、SDGsが掲げる目標と、背景にある世界諸地域の貧困、食糧問題、気候変動などを日本の学校教育がどう扱ってきたかを概説。それらを解決する国際協力のあり方を考え、日本社会の課題であるワーキングプアやジェン



地域密着型サークル「京北宇津宝さがし会」の様子

ダー格差などについても論じます。実際に社会と関わり、より良くする知識や技術を培うために、学外と連携する実践的な科目も豊富です。たとえばデザイン学部建築学科では、既存の施設や構造物を補修・活用して持続可能な地域デザインを学生に考えさせます。京都市内にある高架線路下の空間1kmを使い、地域活性化や子育て支援に役立てるアイデアを住民や市役所、電鉄会社に提案したり、歴史ある京都のまちづくりに学び、学生に積極的な地域参加をうながしたりするなど、多様な授業を展開しています。

研究や課外活動でも 積極的な取り組み

教員の専門領域の研究や、学生が参加する課外活動でも、「目標11…住み続

けられるまちづくりを」や「目標12…つくる責任 つかう責任」など、本学のもつ資源を生かした積極的な活動が行われています。

2013年から人文学部(現在は国際化学部)の教員田村有香が研究の一環として、学生たちと続けている地域密着型サークル「京北宇津宝さがし会」もその一つ。過疎と少子高齢化が進む京都市北部の農村で、地域の宝魅力ある地域資源を見つけて発信し、関係人口(地域に関わる人)を増やす活動です。川遊びや四季折々の写真を撮る子ども向けワークショップの企画・運営、農作業や朝市の手伝い、清掃活動、空き家を利用した移住促進策など、自治会や地域住民と連携して持続可能なまちづくりをめざしています。

デザイン学部ライフクリエイションコースでは、教員と学生有志が、制作

Pickup

海外の各機関とも協力 によりよい世界をめざして

海外との研究交流も活発です。代表的な研究の一つが、デザイン学部教員小北光浩が参加する多国間での産学連携共同研究「FISHKNZプロジェクト」。魚革製品に関する各国の伝統技術を調査し、持続可能な素材開発と海洋資源を軸に、循環型社会経済の構築をめざします。研究では、ファッション業界でのサステナブルな原材料の課題と、食料加工品で廃棄物となる魚皮に注目。北欧やアイヌの加工方法、京都の伝統的な染色技法など、国や地域も越えて可能性を追究しました。ファッションから海洋生物学まで異なる領域の機関が参画し、魚の均衡維持、環境汚染の軽減まで視野に入れ、より持続的な社会に向けた取り組みとなつていきます。



※「FISHKNZプロジェクト」参加機関は、シエンカー大学、ロンドン芸術大学、ノルディックフィッシュレザ社、アルステインクトリア、イタリア技術研究所、イスラエル海洋センター、コルネットデジタル社、アイスランド芸術アカデミー、ヴィタレント、京都精華大学。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGsが掲げる17のゴールは、環境、社会、人権、教育など、世界が抱えるさまざまな問題の解決をめざしたもの

SDGsを真に実現するために立ち止まって考えてほしいこと

— 学長からのメッセージ —

京都精華大学の学長としてSDGsの取り組みを今後も積極的に進めていくのはもちろんですが、私はアフリカの地域研究が専門の人類学者でもあります。その立場から、みなさんにぜひ知ってほしい、そして一度立ち止まって考えていただきたいことがあります。

SDGsの前身にMDGs(ミレニアム開発目標)というものがあつたことをご存知でしょうか。2000年の国連サミットでの宣言を受け、2001年から2015年までに達成するべき8つの目標(ゴール)を掲げていました。

「極度の貧困と飢餓の撲滅」「初等教育の完全普及」「乳幼児死亡率の削減」など、そのめざすところは明確でした。貧困にもなう生命の危険をなくす。つまり、発展途上国の課題解決が目標でした。内戦などで政情不安が続き、経済的に貧しく、医療・衛生環境も劣悪な国では簡単に人が死んでいきます。私の研究対象で、妻の出身国でもある中部アフリカのコンゴ民主共和国もそうです。

1990年代後半、長年の独裁政権が崩壊し、新たな大統領と反政府勢力の激しい内戦が勃発しました。いったん収まったものの、私が妻と二人の子と一緒に現地を訪れた1998年、また戦争が始まりました。私たちは森に逃げ込み、親戚や知人に助けられて、やっとの思いで国外へ脱出したのです。

町は荒れ、強制的に道路補修に駆り出される人たちがいました。病気になる人も薬がなく、小さな腫れ物ができて一晩のうちに亡くなる赤ちゃんを見ました。結核やマラリアも多いですが、予防注射や薬はお金がないと手に入りません。トイレや下水道がないため病気が広がります。雨季には暴風雨で木が倒れて人が死んだりする。混乱は現在に至るまで続き、コンゴ東部では今や100もの武装集団が乱立し、各地域を支配しています。コンゴだけではありません。西アフリカでも平穏な国は多くなく、たとえばマリではイスラム過激派を鎮圧するために政府がロシアの傭兵組織に頼り、彼らによる市民の虐殺が報じられています。ロシアによるウクライナ侵攻は連日報じられますが、軍政下のミャンマーの現状はどれだけ知られているでしょうか。

人類学では、人種や国籍や民族にかかわらず人間は基本的に同等で、平等だと考えます。しかし現実はそのようではない。発展途上国と先進国で、人の命の重さが明らかに異なっています。

こうした発展途上国の状況を改善し、格差を少しでも縮めようとしたのがMDGsでした。目標を明確に、お金もしっかり投じたからでしょう。一定の成果を上げ、いくつかの指標はかなり改善されました。でも未達成のものも多く、まだまだ格差は大きい。さらなる取り組みに

私は期待していました。

ところが、SDGsになると17目標・169ターゲットと大幅に広がりました。先進国の課題が入ってきたからです。数が増えただけでなく、内容も変質した。たとえばSDGsの前文には「ジェンダー平等とすべての女性のエンパワメントを達成する」とあります。MDGsにも同様の目標がありました。それは女性の教育水準と乳幼児死亡率が強く関係しているからです。私は女性のエンパワメントに全く賛成です。しかしこの前文を読んだとき、SDGsが発展途上国から先進国にその焦点を移した、との印象を持ちました。

MDGsを貫いていた「救える人を死なせない」という大きな理念が、SDGsではあいまいになった。衣食足りて礼節を知ると言いますが、まず衣食が足りない人たちがどう救うのかという意識が薄くなってしまったように感じるので、世界には、今も理不尽に命を奪われる人たちがいる。人間の生存権が守られていない国がある。そのことを忘れないでほしい。広い視野を持ち、国籍や文化や宗教の異なる人と交流し、彼らに思いをはせてほしいと願います。それこそが「すべての人びとの人権を実現する」「誰一人取り残さない」と前文にうたうSDGsを本当の意味で達成することになると思います。



澤田昌人
2022年度より京都精華大学 学長

京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。理学博士。山口大学教育学部講師を経て、本学に赴任。アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民、農耕民の世界観についての研究、および中部アフリカの現代史に関する研究を行う。



学内5カ所に設置された「セイカマテリアルリユースステーション」

後に余った資材などを他の学生に譲る「セイカマテリアルリユースステーション」を考案し、学内5カ所に設置しました。これまで廃棄されることも多かった木材、色鉛筆などの画材、その他さまざまな素材がステーションを介して再利用されています。ものづくりを行う大学としての、資源を無駄にせず、うまく循環させる取り組みです。

誰もが安心して学べる 学生支援策も多数

学生たちが、自身のバックグラウンドや属性を理由に不自由や差別、排除を感じることなく平等に学び、安心してその人らしい大学生活を送れるように、支援の充実にも尽力しています。

本学では2018年に「障害学生支援に関する基本方針」を定めています。それ以前から聴覚障害のある学生



「みんなのトイレ」ロゴマークは学生が考案

向けにノートテイクや映像教材の文字起こしサポート、視覚障害のある学生向けにはテキストを音声データ化するなどの支援を行ってきました。点字資料のほか、音声・点字対応パソコンや読み上げ設備のある点字図書室も早くから開設。全国の大学の障害学生支援ランキング(AERAMック2022年版・朝日新聞出版)では総合14位(支援4位・授業13位)となっています。

ほかにも、多様な性自認のありかたに対応し、誰でも利用できる「みんなのトイレ」を学内24カ所に設置。本学では性別への違和感などの理由による学籍簿の氏名・性別変更も可能で、大学で発行する証明書にも性別の記載はありません。

学生の食生活を支える食堂では、宗教上の理由やアレルギー等で特定の食材が食べられない人向けに、使用する食材をメニューに表示。また、奨学金利用者が増加する昨今の状況をふまえ

教職員の採用や規則も 格差解消を進める

教職員の職場環境や就業規則においてもジェンダーや国籍、働き方などによる格差を生じさせないよう、さまざまな取り組みを進めています。

2016年には教職員の就業規則を改定し、特別休暇や弔慰金の対象とする配偶者を、同性パートナー等まで拡大しました。また、中期計画で専任教員の女性比率向上を掲げ、2022年度現在では約3割となっています。しかし、まだ学部や学科によって比率に偏りがあるため、目標値より著しく低い場合は女性限定採用を行うこととして、さらなる改善をめざしています。

さまざまな個性・特性を持つ教職員が働くキャンパスでは教育内容や表現活動、友人関係など、あらゆる面で多様性が生まれます。そこで経験したこととは学生の異文化理解や他者への想像力を育てるでしょう。「人間尊重」「人格的平等」を掲げて出発し、グローバル教育をめざす京都精華大学にとって、SDGsとは大学の理念そのものと言えるかもしれません。

Pickup

サポートを通じて学ぶ 学生サポーター制度

聴覚障害のある学生のそばで、授業内容や板書を書き取るノートテイクやパソコンテイク。映像教材の文字起こしや字幕付け。読み上げツールに使用するための印刷物のテキストデータ化……。これらはすべて、学内の「障害学生支援室」に登録した学生サポーターがアルバイトで行っています。最初に研修を実施し、スキルアップ講習も行いますが、見えにくさ、聞こえにくさなどは個人によって異なります。サポーター学生は、利用学生とコミュニケーションを取りながら業務にあたる必要があります。違いを知ること互いに学び合える機会にもなっています。



明窓館が始動

2022年10月、新校舎「明窓館」のすべての施設が完成しました。500人以上を収容する大ホールやギャラリー、異文化を学べるカフェやコミュニケーションスペース、イベントスペースなどを併設するこの建物には、未来に向けた思いが詰め込まれています。

Interview

学生の憩いの場となり、常に進化し続けてほしい

明窓館は、学生たちによって変化していく建物です。潤沢に用意された共有スペース以外にも、たとえばカフェでは作品を展示したり、什器を自分たちでつくったりすることもできると思います。みずから関わり、自分たちで進化させていく仕掛けをたくさん用意したので、アイデアを出し合って発展させてほしいですね。卒業生のみならずにも、近隣の方にもぜひ新しい明窓館を見に来ていただきたいです。



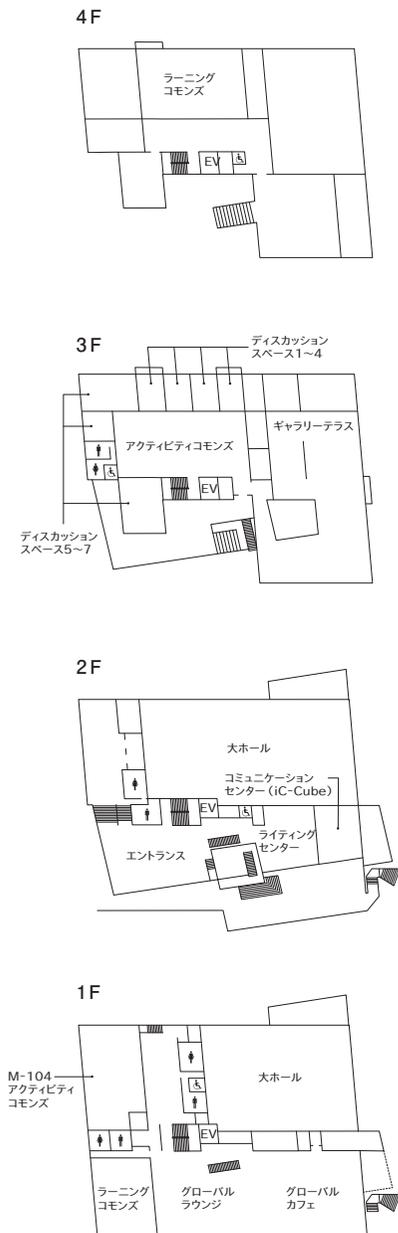
熊谷 徹
総務グループ
施設担当



新しい明窓館は、大学がビジョンとして掲げる3つのキーワード「表現」「グローバル」「リベラルアーツ」を体現した建物です。長年親しまれながらも老朽化した旧・明窓館を建て替え、「これからの京都精華大学のシンボルとなるように」という願いを込めて生まれ変わりました。

ガラス張りの開放的な外観で、すべての学生や教職員をはじめ、国内外問わず多様な人々が訪れ、交流できる開かれた場所を多数設置しています。1階にあるグローバルカフェは、食を通

じて世界の文化を知ることができる居心地の良い空間です。2階には大ホール、3階には本格的なギャラリーを備え、さまざまな表現活動を支えます。他にも留学生と学び合う交流スペースや、展示やイベントなどで活用できる自由度の高い多目的スペースなどを設置。レイアウトも人数や目的に合わせて学生自身が変更できるよう工夫し、主体的な学びを支える空間に。学部やコースの垣根を越えた出会いを通じて、教室外でも知識や経験を深め、互いに成長できる場をめざします。



● ギャラリー (3階) 本格的な展示ができる表現の場

全学共通の施設、京都精華大学ギャラリーTerras (テラス)では、本学が主催する2回の企画展をはじめ、在学生や卒業生、教職員が企画運営する申請展などが行われています。「Terras」はラテン語・イタリア語で「土、大地、大地の女神」を表す「Terra」と「Seika」の頭文字をつなげたもの。現在地を照らし、未来を展望するという意味も込められています。展示面積は520㎡という広さで、関西でも有数の規模となっています。ギャラリーのオープン前から内装に

関わり、現在は主に企画展を担当する展示コミュニケーションセンターでは、学生や卒業生、教職員の作品を発表する場という大学ギャラリーとしての役割をベースに、広く学外にも開かれた場にしていきたいと考えています。開館して約8カ月。すでに多様な展示会やワークショップ、トークイベント等が開催され、作品を通して新たな発見や出会いを提供する、本学を象徴する表現活動の場の一つとなっています。

● その他の施設



エントランス

全面ガラス張りで、天ヶ池に面した明るい空間。ここで展示やイベントを行うことも可能です。



大ホール

512名を収容できるホール。授業や学生の成果発表、講演会など、幅広い利用を想定しています。



コミュニケーションセンター

キッチンを備えた交流スペース。留学生が出身地域の料理を通じて文化を紹介するなど活発に展開中。



ラーニングcommons

約100人を収容する教室で、講義形式の授業が行われます。4階は窓の外が一面の緑で開放的な雰囲気。

● カフェ (1階) 食を通して世界に触れる

「食を通して世界に触れる」ことをコンセプトにしたグローバルカフェ、CAFE LA TERRACE。食についてグローバルに考え、地域や学外の幅広い人々とも共有・交流できる場をめざします。パスタなどの定番メニューに加え、こだわりのオリジナルメニューなど、国際色豊かで多様性に配慮した食事を提供しています。ラテや自家製プリンなど、ドリンクやスイーツも充実しており、研究や制作の合間に利用する学生も。緑が多くリラックスできる空間でホッとひと息ついてみませんか。



細川 信一郎さん
CAFE LA TERRACE オーナー
Producer/Designer
美術学部 ビジュアルデザイン専門分野
1990年卒業

さまざまな国や地域から学生が集まる京都精華大学ならではの異国文化、多国籍料理を追求したいと考え、プロデュースを行いました。提供する料理や飲み物はシーズン毎に変化していく予定です。明るい光が差し込む広々とした店内や屋外スペースにて、思い思いの時間を過ごし、コミュニケーションの場としてご利用ください。



知れば知るほど奥深い 風呂敷や袱紗の魅力 世界中に発信

小山 祥明さん
Hiroaki Koyama

学芸員
宮井株式会社 勤務

人文学部 人文学科
1997年卒業



日本語の面白さを 世の中に広められる コンテンツをつくりたい

ソ ジウンさん
Suh Jieun

コンテンツクリエイター・
元ゲームデザイナー

マンガ学部 アニメーション学科
アニメーションコース
2016年卒業



セイカの思い出

木野祭には剣道部で参加。バナナ天ぷらの材料の買い出しに、大学周辺のお店のバナナを買い占めたのもいい思い出です。



卒業生インタビュー

独自の道を歩む京都
現在の活動や今後の夢、

精華大学の卒業生に、
セイカの思い出を伺いました。

セイカの思い出

3年生の夏のオープンキャンパス。同じゼミのメンバーとライブペインティング(背景画の模写)を披露しました。



パリ市庁舎前広場で行われたFUROSHIKI PARISでは、パビリオン内が一面唐草模様!

創業125年の歴史を刻む宮井株式会社に勤務する小山さんは、約3,000点もの風呂敷や袱紗(ふくさ)の染織コレクションの管理運営を担当されています。「学芸員の資格を活かせる!と入社しましたが、最初は風呂敷や贈答儀礼の知識が全くと言っていいほどなかったんです。会社の書庫にもって、関連する書籍を読み漁る日々でした」と新人の頃を振り返ります。現在はその他にも、美術館や博物館の依頼で資料を貸し出したり、テレビや雑誌の取材の対応をしたりと、業務は多岐にわたります。NHKの番組『チコちゃんに叱られる』では、「なぜ泥棒といえば唐草模様の風呂敷なのか?」という疑問も解説されたそうです。どんな仕事でも楽しみを見つけて取り組む姿勢は、大学時代の経験が影響していると言ってくれました。「未知のことも、できないと頭で考えて避けてしまわずに、まずはやってみよう。そして楽しんでみよう。大学で出会った友だちや先生方の影響で、そんな考え方ができる



韓国で出版した著書はイラストも自身で手掛ける

幼少期に東京で暮らし、母国の韓国に帰ってからも、日本で出会ったアニメ、マンガへの愛を持ち続けていたソジウンさん。高校2年生の時にセイカが存在を知り、日本への留学を決意したといいます。卒業後は、グリー株式会社でゲームデザイナー、アートディレクター、マネージャーとしてキャリアアップするなか、日本語の次は英語を学びたいという思いもあり、海外移住を考え退職。現在はカナダで語学留学されています。いまは英語習得のため勉強中心の生活を送っているのですが、SNSでは個人で韓国の方向けに日本語を教える教育コンテンツを展開されています。「たとえば『タビ』などの若者言葉やビジネスで使われる言葉は、教科書には載っていません。この面白さを伝えたいと思って、イラストとともに韓国語で紹介しはじめました。このアカウントが、いつしか韓国の出版社の目に留まり、昨年末に『ネイティブ日本語に本気です』(ご本人訳)として出版されました。その



風呂敷や袱紗の歴史や包み方の解説に関わった書籍

ようになりまし。幅広い仕事に携わる今、とても役立つと思っています。授業がない時は図書館へ行って、一日中読書に明け暮れたこと。はじめて行ったチベット研修で高山病になったこと……セイカで経験した自由な時間すべてが、小山さんのいまにつながっています。風呂敷や袱紗の使い方を広めるのも、小山さんの仕事の一つです。全国の小中学校をはじめ、数年前にはパリやロンドンでもワークショップを開催しました。友人や知人にワインをプレゼントする文化があるフランスでは、ボトルを風呂敷に包んで贈ることを提案。包み方に非常にこだわり「どうしたら綺麗に包めるのか」と熱心に質問されたときは、フランス人の国民性が垣間見られて面白かったと振り返ってくれました。今後についてたずねると、ECサイトでの販売にも注力したいとのこと。「目の前にお客さんがいればポイントを直に伝えやすいのですが、写真や文字だけでは難しい。どう落とし込んで伝えるかが課題です」。小山さんの楽しみは尽きません。



SNSでは教科書には載らない言葉、面白い表現を取り上げる

後は、日本語を教えるコンテンツを動画やアニメーションでも発信するべく日々取り組んでいるそうです。

ゲームデザイナーからコンテンツクリエイターへと転身したソジウンさんですが、「ゲーム制作の仕事も、SNSも、本をつくることも、セイカでクリエイティブを幅広く学べたことが生きています」といいます。「授業やゼミで提出する課題に対して、先生方から厳しいフィードバックを受けることもあり、自分にあまりなかったはずの向上心が芽生えました。メンタルが強くなりましたね」と笑顔で語ってくれました。ゲームデザイナーとして働いていた時も、今の教育コンテンツも、ソジウンさんにとって一番の励みはユーザーの感想や意見。大切な指針となっています。

これまでの人生を韓国と日本で半分ずつ過ごし、来年にはオーストラリアへの移住を計画されているそうです。クリエイターとして柔軟に変化しながら、目標に向かって日々邁進されています。

京都精華大学で行われている研究について、教員が活動内容をご紹介します。
2022年度の学長指定課題研究※からピックアップしました。

※学長が指定する特定の課題・テーマに則した先進的な共同研究を推進する制度

『遠隔多言語空間における協働の可能性 —西アフリカ諸国の大学との学生交流(CALEBASSEプロジェクト)を起点として—』



研究代表者
藤枝 絢子
国際文化学部教員
〈専門分野〉
人間環境設計論、地域研究など



ワークショップの様子

現代ではSDGsなど、地球規模で取り組むべき課題が多くあるにも関わらず、日本人学生の海外に対する関心は決して高くありません。なかでも、アフリカに関する日本の報道は限定的なもの。アフリカに暮らす若者が、日本の社会や文化について高い関心をもっているのに対し、両地域の若者同士はほとんど交流の機会もありません。本学では2020年度より、西アフリカの複数の大学と協定を結ぶなど連携体制の強化をめざしてきました。2021年度は、セネガルのガストン・ベルジェ大学、ブルキナ・ファソのジョゼフ・キルゼルボ大学、カメルーンのマルア大学と連携し、計5回のワークショップやギフト・チェンジを実施しました。この研究の最大の特徴は、プログラムへの参加をきっかけとして、学生の海外文化への関心がどう醸成されるか分析するものであり、オンラインでの交流に加え、テーマを決めて物を贈り合うなど、遠隔でも可能な多層的な文化理解の機会を模索しています。波及効果としては、西アフリカ諸国の学生との交流を通して、他文化への理解が促進されることが想定されます。また、実際に共同で制作に取り組むなどの体験を通して、学生たちが国を越えたネットワークを形成し、将来的には、卒業後の活動にもつながる基盤を構築してくれることを期待しています。

『ギャラリーTerra-S企画展への展開を視野にいれた情報館収蔵品及び本学卒業生作家の調査研究』



研究代表者
伊藤 まゆみ
展示コミュニケーションセンター教員
〈専門分野〉
現代美術、アートマネジメント

「越境—収蔵作品とゲストアーティストがひらく視座」展示風景 撮影:表恒匡



すでに「越境」展出品作家の収蔵作品・資料の保存状態点検やデジタル化、著作物利用許諾の取得を行いました。現在、長岡國人とクラウディア・テルスタッペン の2名の収蔵作家についても調査しています。収蔵品は、現在と切り離されて収蔵庫に眠る。歴史に留めるべきではありません。大学のギャラリー機能を生かし、最終的には作品をその他の資料とともに展示公開する「展覧会」の形で広く発信していきたいと思

2021年度に採択された学長指定研究「新ギャラリー—開館記念展への展開を視野にいれた情報館収蔵品及び出品作家の調査研究」では、情報館の収蔵品を重要な学内資源であると考え、収蔵作家と新規作家の調査を行い、内容を固めることができました。2022年度は、ギャラリーリニューアル記念展「越境」の実施を通じた6名の収蔵作家の研究継続に加え、新設されたTerra-Sの今後の活用に向け本学卒業生の調査を行っています。情報館博物館部門には、8年以上の間、専門の芸員が不在となっており、重要な学内資源である本学収蔵品の保管および活用に関しては課題が山積しているのが現状です。さらなる研究を進め、収蔵作品の適切な管理・修復についても提案していきたいと考えています。

その他学長指定課題研究 (2022年度)

- 『人文学部・国際文化学部スチューデント・commons Casaの展開—学科・学年を越えた学生交流の育成—』 恵友友紀子 (国際文化学部)
- 『ギャラリーTerra-Sにおける23年度メディアアート展示の可能性の探索及び「データ・ビジュアライゼーションの現在」/「遊びのデザイン」展示企画』 伊藤ガビン (メディア表現学部)
- 『地域活性化の拠点を利用した交流の発展—中山間地域の農産物を利用したブランディングの試み—』 田村有香 (国際文化学部)
- 『アートによる地域公共交通機関の活性化研究—エイデン・アート—』 米本昌史 (デザイン学部)
- 『多文化ポエトリリーディングのためのオンラインプラットフォーム開発に向けた予備研究』 安田昌弘 (メディア表現学部)
- 『本学の特性を生かしたSTEAM教育の導入と社会連携—国内外のSTEAM教育の調査をもとにして—』 鹿野利春 (メディア表現学部)

木野からヤッホー

あの先生元気かな...? そう思っている卒業生のみなさんへ、セイカの教員からのメッセージです。



1

3



2



- 1.京都市が掲げる未来の京都「DO YOU KYOTO? 2050」のビジョンビジュアルを担当 (岸本)
- 2.フランス・リヨンでの個展の際にて。画廊の前でオーナーと一緒に (生駒)
- 3.「花野行く 太陽の下 風の中」(星野立子) 花野というのは、秋の草花などが咲く野原のことです。春の華やく野とは違い、秋風に揺れる花々には哀愁をさそう趣があります (藪内)

今年で20年目。ことばの研究を続けています。

二紀展の巡回展で200号を出品します。

ずっと変わらない1枚の絵を描く楽しさ。



藪内 智
メディア表現学部

2003年に赴任し、今年で20年目を迎えました。今は「語彙ネットワークデータベースの構築」というテーマで、大学院時代からの仲間たちと研究に取り組んでいます。また、個人では、オノマトペ、音韻表象、動詞の構造、日本人英語の音声特徴などを細々と研究しています。コロナ禍もあり研究室を訪ねてくる卒業生が減りましたが、それでも、結婚の報告に来てくれたり、近くまで来たついでに寄ってくれたり、コーヒーなどを差し入れてくれたりする卒業生があり、嬉しく思っています。大好きな写真撮影やコーヒーは趣味の域を超えるかもかもしれません。

私のお気に入り

コーヒー好きが高じて焙煎機を買ってしまいました。研究室までお越しくださったら、おいしいコーヒーをごちそうしますよ



生駒 泰充
芸術学部 造形学科

1987年に赴任して以来35年ほどになり、2024年に定年退職となります。長い間、この大学にお世話になりました。数えてみたら洋画の卒業生を1000人以上送り出したこととなります。街でたまに卒業生に声をかけられたりしますが、名前は出てこなくても顔と絵は大概覚えてます。見かけたら声をかけてください。6年くらい前から、フランスの画廊とのお付き合いができ、今まで、フランスのパリ、マコン、リヨン、スイスのローザンヌなどで個展をさせていただきました。2月に京都市京セラ美術館で二紀展の巡回展に200号を出品します。文部科学大臣賞をいただいた作品です。

私のお気に入り

5年くらい前から、ハーモニカにハマっています。どんなでもない超絶技巧の演奏者がいたりして、奥が深いジャンルです



岸本 敬子
デザイン学部 イラスト学科

私事ですが、2020年に結婚・出産し、2022年春から復帰しています。母親と教員の二足のわらじを履くというのは、どちらにも10割の力は発揮できないという状態。最初はどちらも中途半端な自分に嫌気が差しましたが、制約内でできることを精一杯やろうと日々奮闘中です。大学では、愛亀「カメヨシ」をスタッフルームに出勤させ、学生にかわいがってもらっています。個人的なお仕事では、京都市が掲げる「DO YOU KYOTO? 2050」のビジョンビジュアルを描きました。さまざまな方の想いを聞き、京都のより良い未来を想像しながら絵を描く行為にワクワクしました。

私のお気に入り

趣味で作っているガラスのブローチ。どれをつけていこうか服に合わせて考えるのが楽しみです



美術史家、アーティストによる講演会をWEB配信



アセンブリーアワー講演会

「表現と居場所」
潘逸舟（アーティスト）
2022年6月23日（木）

「アートは世界を救うか？」
岡田温司（本学 教員／美術史家）
2022年7月14日（木）

※講演会レポートを本学Webサイトに掲載しています。



開学から続く公開講座「アセンブリーアワー講演会」をWEB配信とあわせて実施しています。

6月23日には、アーティストの潘逸舟氏が講演。上海に生まれ幼少期に青森に移住した経験を持つ潘氏は、社会と個の関係の中で生じる疑問や戸惑いを、自らの身体や身のまわりの日用品を用いて表現してきました。本講演では、「表現と居場所」をテーマに、「人間はなぜ表現を始めるのか。それを、異文化の中で居場所を見つけないという視点から考えてみたい」と語られました。今回は、インスタレーションという表現方法に出会った高校時代から現在にいたるまでの表現活動の軌跡を、アーティスト

ト本人とともにたどる貴重な機会となりました。

7月14日には、本学の大学院芸術研究科教員でもある美術史家の岡田温司が「アートは世界を救うか？」をテーマに講演。講演会は「この騒々しい世の中で、現代社会が抱えているさまざまな問題を前にして芸術に何ができるのか」という問いから始まり、人間の経済活動によって地球環境が破壊される「アントロポセン」（人新世）の時代に入ったという指摘もあがるなか、芸術はどのようにアプローチできるのか、その可能性を考える時間となりました。

国内外で活躍する作家の展覧会を多数開催



「描くひと 谷口ジロー展」
2022年6月2日（木）～8月29日（月）

「大乙嫁語り展」
2022年9月17日（土）～12月26日（月）

「京都国際マンガ・アニメフェア2022（通称：京まふ）」
2022年9月17日（土）、9月18日（日）
京都国際マンガミュージアム

京都国際マンガミュージアムにて、企画展「描くひと 谷口ジロー展」を6月2日から8月29日まで開催。展覧会では、緻密な作画と構成により国内外で高く評価されている漫画家・谷口ジロー氏の原画約300点が展示されました。細密な描き込みや自然の色彩に根差した色使いなど、50年以上にわたって描き続けてきた谷口氏の軌跡がたどられました。

また他にも、西日本最大規模のマンガ・アニメイベント「京都国際マンガ・アニメフェア2022（通称：京まふ）」の連動企画として、9月17日から企画展「大乙嫁語り展」が開催されました。「乙嫁語り」は漫画家・森薫氏が200

8年より連載開始。魅力的なキャラクターとストーリー、緻密に描き込まれた美麗な作画に加え、舞台となる中央アジアの文化や生活がいまひとつと表現され、幅広いファン層に支持されています。展覧会では、本作のカラーやモノクロ原稿を中心に1000点以上の原画が展示されました。

「京まふ」のメインビジュアルには、マンガ学部キャラクターデザインコース卒業生の南岡明花音さんのイラストが採用されています。未来の京都をイメージした街並みを描いた南岡さんの作品は、ポスターなどのオリジナルグッズにも多数活用されました。

廃校や過疎化が進む島を舞台にアートプロジェクトを展開

芸術学部教員、学生、卒業生有志が、今年も2つの芸術祭に参加し地域を盛り上げました。

7月30日より開催されたアートのトリエンナーレ「越後妻有 大地の芸術祭2022」（新潟県）では、廃校となった十日町市立中条小学校枯木又分校を拠点に、「枯木又プロジェクト」として継続的に取り組んでいます。本プロジェクトは、芸術学部立体造形専攻教員の内田晴之、吉野央子を中心に開催されています。緑に囲まれた立地を活かし、風景・農業・養鶏・食・循環といった、人間と自然、地域の共存において重要なテーマに対して、インスタレーションや映像、彫刻など広く作品を展開。企画にはキ



「越後妻有 大地の芸術祭 2022」
2022年7月30日（土）～9月4日（日） 旧枯木又分校（新潟県）

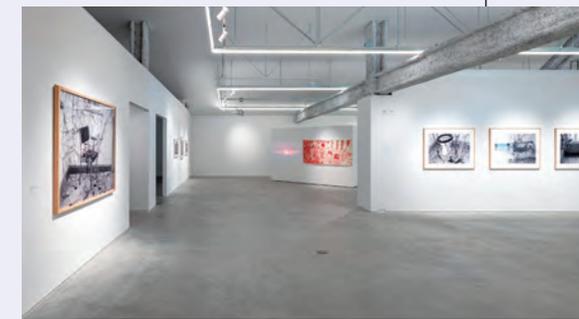
「瀬戸内国際芸術祭2022」
2022年9月29日（木）～11月6日（日） 高見島（香川県）

レーターとして活躍する同学部教員で、副学長の吉岡恵美子も協力しています。

8月14日には、芸術研究科博士前期課程の鐵羅佑さんによる暗黒舞踏の公演「地敬」を開催。内田のピオトップ作品に入り、周囲の環境と一体になった踊りを披露しました。

また、9月29日から開催された瀬戸内海の12の島と2つの港を舞台に開催される現代アートの祭典「瀬戸内国際芸術祭2022」でも、香川県にある高見島を舞台に、アーティスト自身が空き家を改装し作品を展示するなど、現地の人々と深く関わりながら取り組みを行っています。

アーティスト11名の作品を展覧するリニューアル記念展



撮影：表恒匡



「越境ー収蔵作品とゲストアーティストがひらく視座」
2022年6月17日（金）～7月23日（土）
明窓館3FギャラリーTerra-S（テラス）

新・明窓館のギャラリーTerra-S（テラス）開設を記念して、6月17日から記念展「越境ー収蔵作品とゲストアーティストがひらく視座」を開催しました。本展は既存のジャンルや制度、価値観における「越境」をテーマとして、「ジェンダー／歴史／身体／アイデンティティ／土地／記憶」などのキーワードを参照しながら、11名のアーティストの作品を展覧する試みです。

展覧会では、本学が収蔵するシユウゾウ・アツチ・ガリバー、今井憲一、ローリー・トビー・エディソン、塩田千春、嶋田美子、富山妙子の作品に加え、いちむらみさこ、下道基行、谷澤紗和子、津

村侑希、潘逸舟といった2000年代以降に活動を開始した5名のゲストアーティストの作品を紹介。出身や世代、表現手法はさまざまですが、個人と社会、自己と他者、想像と現実、ジェンダーなどにおける固定的な輪郭を、しなやかに、かつ鋭く揺さぶる11名の表現者が織りなす展示となりました。

関連イベントとして、6月17日のオープニング・イベントを皮切りに、下道基行氏による朗読会や谷澤紗和子氏によるワークショップなどを実施。7月23日にはシンポジウム「作家たちの越境」富山妙子、ローリー・トビー・エディソン、嶋田美子」も開催されました。（敬称略）

京都精華大学展2023 -卒業・修了発表展-

2023年2月15日(水)~2月19日(日)

【場所】京都精華大学
※2月18日(土)、19日(日)はオープンキャンパスも同時開催(要予約)

京都精華大学ギャラリーTerra-S ※入場無料

- 「光の向こう側で(仮)」
2023年1月6日(金)~1月18日(水)
- 「ドゴン族の世界 第2回」
《世界創世神話の「ドゴン族」の日常に迫る》(仮)
2023年1月6日(金)~1月18日(水)
- 「京都精華大学大学院1年生研究制作展」
2023年1月24日(火)~1月28日(土)
- 「京都精華大学展2023 大学院展」
【芸術研究科・デザイン研究科・マンガ研究科】修了発表展
2023年2月15日(水)~2月19日(日)
- 「○○が連続された時(仮)」
2023年2月27日(月)~3月9日(木)
- 「芸術学部立体造形3回生グループ展~兆し~」
2023年2月27日(月)~3月9日(木)
- 「高校生のための第4回創作作品コンペティション」
SEIKA AWARD 2023入選作品展
2023年3月16日(木)~3月22日(水)

【休場】日曜日・祝日
【時間】11:00~18:00
【問い合わせ先】☎075-702-5263



京都国際マンガミュージアム

- 「あつまれ!マンガワークショップ博」
2023年3月18日(土)~5月28日(日)

【休館】Webサイトをご確認ください。
【時間】10:30~17:30(最終入館/17:00)
【問い合わせ先】☎075-254-7414



その他公開講座

- アセンブリーアワー講演会
- 公開講座ガーデン
など



サテライトスペースkara-S

- ショップ
 - ギャラリー
- 在学生、卒業生の作品が並びます。



活躍する在学生、卒業生の情報を募集しています。

情報をお持ちの方は、広報グループまでぜひお知らせください。

- 京都精華大学 ウェブサイト
<https://www.kyoto-seika.ac.jp>
- 広報グループ
kouhou@kyoto-seika.ac.jp



News

05



西アフリカの農耕民「ドゴン」の文化に触れられる展覧会を開催

アフリカ・アジア現代文化研究センターでは、7月16日から8月7日にかけて、アフリカ文化を紹介する展覧会「World of Dogon:ドゴンの世界への誘い」をサテライトスペース Demachiで開催しました。

ドゴンは、西アフリカ・マリ共和国のバンディアガラ地方の高原と断崖地帯に暮らす農耕民です。今や世界各地で大きな関心を集め、広く知れ渡るドゴンの儀礼に使用する仮面、装飾品を中心に、染織・写真・映像などを交えて展示しました。展示期間中は、ウスピ・サコ(アフリカ・アジア現代文化研究センター長)や浜 裕夫氏(DOGON西アフリカ・クラブ代表)、吉田憲司氏(国立民族学博物館長)によるトークイベントも実施されました。

News

06



叡山電鉄株式会社主催「八瀬えいでん 夏まつり」に参加

7月16日に八瀬比叡山駅で開催された「第6回八瀬えいでん 夏まつり」に本学の学生が参加、祭りを盛りあげました。この企画は、本学と包括連携協定を締結している叡山電鉄株式会社からの依頼によるもので、カートゥーンコースの在学生有志による似顔絵スタジオの出店と、フォークソング部の有志4バンドによるステージ出演が行われました。コロナ禍の影響で3年ぶりの開催となる祭りの会場では、他にも国際文化学部教員の堤 邦彦が監修した怪談「京都古典怪談傑作選」の実演が行われたり、ヨーヨーつりや射的が出店する縁日などが並んだり、たくさんの家族連れでにぎわう夏らしい催しとなりました。

News

03



リユースの浴衣と古着を組み合わせたファッションワークショップを開催

デザイン学部ファッションコースでは、本学と協定を結んでいるベルギーのラ・カンブル国立美術学校で18年間教鞭をとられている武田亜矢氏をお招きし、在学生対象のワークショップ「アップサイクル×クリエイション」を8月6日、7日に開催。京都の旅館で使われなくなった浴衣と、学生が持参した古着やカーテンなどの布類を組み合わせて、1体の服を立体裁断で制作しました。いま、ファッション業界では、大量生産・大量消費の構造を見直し、持続可能でより幸福度の高い生産・消費スタイルへの移行が求められています。今回のワークショップは学生たちにとって、一般的な「衣服」の概念を捨て、装うことと自由に向き合える機会となりました。

News

04



デジタルクリエイションコース学生が自作VRゲームを体験できるイベントを開催

デザイン学部ビジュアルデザイン学科3年生が、授業「ゲームアプリプロジェクト」で制作したVRゲームを体験できる「VR GAME FESTIVAL」を、9月29日、30日の2日間、京都国際マンガミュージアムで開催しました。デジタルクリエイションコースでは2~3年次に3Dのデジタル技術を習得し、ゲームの企画・制作に取り組む授業を設けています。学生はアナログゲームの企画と商品化を通じてゲームづくりの基本を学び、並行して3DCGやプログラミング、映像編集のスキルを修得します。今回のプロジェクトでは、その経験を活かし、チームで制作した個性あふれるVRゲームを、子どもから大人まで楽しんでもらうことができました。

News

01



カートゥーンコース学生、教員らによるグループ展「マンガ野良の芸術」を開催

マンガ学部カートゥーンコース在学生・卒業生、教員らによるグループ展「『マンガ野良の芸術』マンガクラス創設50周年記念展」が、ギャラリーTerra-Sで10月18日から25日まで開催されました。2022年は、本学にマンガクラスが設立された1973年から50年の節目となります。本展ではそれを記念し、カートゥーンコースが主催となり、教育と実践の観点からこの半世紀の軌跡を振り返りました。

1枚の絵で、見る人にメッセージとユーモアを伝えるカートゥーン。マンガが市民権を得た1970年代から、多様なメディアが複雑に織り成す今日まで、設立当時の資料や、社会で活躍する卒業生や教員、学生らの作品展示を通して、新たな一歩を踏み出す展覧会となりました。

News

02



「関西フランス語話者のためのシンポジウム」を開催。本学教員が進行役等を務める

国際文化学部人文学科日本文化専攻教員のセシル・ラリが副会長を務め、人間環境デザインプログラム教員のアンドレア・フロレス・ウルシマが進行役を務めるシンポジウム「関西フランス語話者のためのシンポジウム」が7月23日に実施されました。7回目の今年は、明窓館4階ラーニングコモンズを会場に、対面とオンラインのハイブリッド開催となりました。シンポジウムは、毎年、フランス語話者の研究者や学生、関西にある学術機関等の交流を促進する目的で実施されています。今年も多様な分野の研究発表が行われました。また、本年度のポスターはデザイン学部イラストコース2年生の高松未歩さんがイラストおよびデザインを手がけました。

～ご支援くださる皆様へ～ (ご寄付のお願い)

本学で学ぶ多くの学生の生活支援、本学のさらなる教育・研究活動の充実のため、温かいご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

●寄付募集Webサイト

<https://www.kyoto-seika.ac.jp/about/donate/>

クレジットカード決済、コンビニ決済、インターネットバンキング決済など、ご希望の方法でご寄付いただけます。また、2022年4月から、自動で継続的なご寄付ができる「継続寄付」の仕組みも新たに導入しています。



●京都市ふるさと納税寄付金

<https://www.city.kyoto.lg.jp/gyozai/page/0000186773.html>

本学は、地域と連携した社会貢献活動にも積極的に取り組んでいます。ふるさと納税の使い道で、「『大学のまち京都・学生のまち京都』の推進～市内大学と協働！学生さんの挑戦を応援！～」をお選びいただき、「京都精華大学と協働！」を指定いただけますと、ふるさと納税の寄付金の一部が、本学の社会貢献活動の費用に充てられます。新しい寄付の形として、ぜひご利用ください。

●リサイクル募金(旧称:古本募金)Webサイト

<https://lp.kishapon.com/seika/>

読み終わられた本やDVDに加え、貴金属、ブランド品、切手、年賀状、商品券などをご提供ください。その査定換金額を京都精華大学に寄付される取り組みとなります。

※2021年度は、法人・個人あわせて54,588,773円のご寄付をいただきました。うち、リサイクル募金は、217,903円でした。ありがとうございました。2022年度も、本学の目指す「表現で世界を変える」教育・研究活動のために、ぜひみなさまにお力添えいただければ幸いです。ご支援・ご協力のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

お問い合わせ

京都精華大学 経営企画グループ 寄付募集担当

E-mail: donation@kyoto-seika.ac.jp

TEL 075-702-5201 FAX 075-702-5391

『木野通信』送付先ご住所等の変更を希望される方は、木野会ホームページまたはFAXで変更事項をご連絡ください。

学校法人京都精華大学 経営企画グループ 木野会事務局

<https://seikajin.com>

FAX 075-702-5391

京都精華大学

国際文化学部

人文学科

グローバルスタディーズ学科

メディア表現学部

メディア表現学科

芸術学部

造形学科

デザイン学部

イラスト学科

ビジュアルデザイン学科

プロダクトデザイン学科

建築学科

マンガ学部

マンガ学科

アニメーション学科

人間環境デザインプログラム

人文学部

総合人文学科

ポピュラーカルチャー学部

ポピュラーカルチャー学科

大学院

芸術研究科

デザイン研究科

マンガ研究科

人文学研究科

表紙の作品

『豊かなものの伝承-こどもが育ち、こどもで育つ-』

2021年度 卒業制作

杉山 未羽さん デザイン学部 建築学科

素材: スチレンボード、木材

サイズ: 1,000mm×1,000mm



ここにある5軒の家。彼らは、独身や夫婦、職業もさまざま。共通することは、こどもはいないがこどもたちに何かしてあげたいと考えていること。そんな彼らがつくりようとする『こどもの場所』=終の住処は彼らの楽しみであり、こどもたちの育つ空間であり、地域に愛される地をめざす。そんな場所を考えたい。

木野通信

KINO PRESS.

木野通信 第79号

2022年12月16日 発行

京都精華大学 広報グループ

〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137

TEL 075-702-5197 <https://www.kyoto-seika.ac.jp>